

## 村山籌子の評伝の試みをめぐって —— 聞き書きのこと（続）の4 ——

山 崎 怜

さらに前回に続いて聞き書きを印刷する。今回も約束にしたがって「ナツ時代友人による」著名な人物3人からの聞き書きである。中身は籌子の生涯でも、とくに重大な友愛、同志愛の部分であり、私としては漸くそれらをここに公表することになった。

村山籌子

——蔵原惟人の述懐について——〔改訂・増補版〕

1980年11月10日 午前10時30分～午後2時30分

1980年11月13日 再訪 午前11時～午後4時30分

（蔵原清人氏のご自宅にて）

周知のように、この聞き書きのことは女学校時代の友人と恩師、籌子の妹たち、村山知義の直弟子、宇野重吉、松尾哲次、陣ノ内鎮、ナツ時代の僚友たち、『少年戦旗』の幾人かの同志たち、知義の後年の妻であった清洲すみ子などについてはすでにその詳細を研究紀要で公表した。残されているもの、すなわち知義の弟子では松本克平、長男の亜土、中野重治と妻の原泉、蔵原惟人、山田清三郎、主治医の塚原俊雄、田河水泡、川尻泰司、松本正雄、岩崎昶、住谷磐根、自由学園時代の松井志づ子、近藤（秦）きよ、石垣（田中）綾子などは本誌既刊号や同人誌などでこれらを——但し、村山知義、村山亜土、中野重治・原泉、兄の昌三などを除いて——公表した。籌子の弟たち、夫君の知義、そして一子、亜土については80編に達するので原稿化には熟考を要する。そこでゆっくり仕事をすすめたいが、私のこの世での時間がどの位のこっているかは全く定かでないので急ぐべきとの声がいつも私の耳に鳴りひびいていることはたしかであるため、今回はある重大な論点について先取りして、いくらかの事実をしるしておきたい。

それは蔵原の聞き書きのある部分である。蔵原は知義の妻、籌子の「恋人」といわれた。それは周辺の友人たち、関係の者には公知の事実であった。そして、そのことは村山知義の作品『白夜』にもかなり赤裸々にかかっている。それはフィクションではあるが、現在進行のドキュメンタリーのタッチでもあり、友人知人の多くは細かい会話のやりとりは別として、そこに示された人間関係はほとんど事実に近いものとうけとっていた。

私が蔵原（1902.1.26～1991.1.25、筆名佐藤耕一、谷本清、古川荘一郎その他）に会いたいと思ったのは籌子研究が10年を経たあたりからではあるが、現役の氏に会うことは不可能であるため、ひたすら研究自体を深め、自然の流れの中でその機会を待つことにし、研究成果がいくらか積み重ねられたときには、そのたび毎にその印刷文を献呈申し上げた。しかし、ご返事は一切なかった。

ほるぶ出版の『村山籌子集』をお送りした頃から、返答は依然として一切なかったけれども、周囲の蔵原の友人が動いてくれて蔵原との面談をとりもって下さった。その友人とは松本正雄、山崎功、永田一脩

である。松本は私の首実検のこともあり、わざわざ来高された。

松本は非合法活動の蔵原の唯一のレポであり、そのレポ役の一部を籌子に株分けした蔵原の固い同志であった。しかし、それでも蔵原との面談は容易でなく、後になって考えると、まず村山知義の在世時代には蔵原は私に会う気は全くなかったし、また村山がこの世にいなくなっても、自分の政治、あるいは政党生活が現役（最後は党幹部会委員）であるときには、その気になれないというのが本音（ね）だったと思われる。

結局、お会いできたのは1980年11月10日であり、氏は78歳、何回かの重篤な病歴を経、現役から離れ、相談役的な自由人の時代を迎えてさらに数年は経過した頃であった。

氏は庭つづきで息子（次男）の清人氏と住み、面談のための電話連絡その他の雑務もすべて清人氏がなされたし、面談の場所も清人氏の居間であり、面談中もコタツにはいって面談するのは惟人氏と私のふたりだけだが、かたわらのガスストーブか電気ストーブのそばに清人氏とその夫人がいて、適当に合いづちを打ったり笑いころげたりされていたので部屋には終始四人がいるという雰囲気であった。つまり、1対1の静かな、非公開の面談ではなかった。いいかえれば、私はふたりだけの面談はゆるさされていないと感じた。

その日の私にとっての感銘と胸さわぎは、はじめて既婚で夫のある籌子が純粋に愛した独身の「恋人」を前にしたということ、また、その「恋人」に宛てた本物の手紙、これまで非公開のオリジナルの手紙をはじめて手にとって見たということだった。

ところで聞き書きの相手がいつもいわれることは、何でもきいて下さい、しかし、いえないこと、いってはならないことは知っていてもいわないよ、それは人間としての礼儀ですから、が話し手の常套句なのだが、蔵原は私がききたいことは見当がついているのでそうしたいい方はせず、一方的に自分からしゃべるといって、私は余儀なく氏のしゃべりに徹底して任すことになった。清人氏曰く、「父は知らない人には会わないことにしています。このたびは全く例外の特別措置なのです。」この予告のあと、あれこれ雑事の話があって、やがて和服姿の惟人があらわれ、「やあやあ」とニコニコ顔で渡辺崋山についての自らの著書を持参され「これを差し上げる」といわれ、自分は字が下手で相手の名はかけないのだとつけ加え、さらに「ぼくへの手紙で字を習いなさい」と籌子さんがいっているね、とされた。これはあいさつ代わりのおことばと思われる。

以下は要点のみである。私の質問に答えるというよりは、ご自分が私に伝えたいと思ったことをすすんで述べられたこととみられ、その中身も形も蔵原がとくに選んで話題にしたという点でその意味を汲みとっていただきたい。

したがって、ここでは通常の間答形式で記録することはできない。

惟人氏 「あなたは大変熱心でびっくりした。章にしても、かの女の妹さんの名前であることをあなたの本ではじめて知った。」〔章はあやとよむ。〕

〔籌子は下獄後の蔵原に蔵原章の名で手紙をかいた。下獄後の囚人には家族しか手紙を送れないので、籌子はこの家族姓とその一員の名で獄中の惟人に手紙をかいた。〕

惟人氏 「人はぼくがかの女に結婚を申し込んだというけれども、そんな事実はありません。」ここで清人氏とその夫人が笑う。〔この発言はとくに山崎にいたかたことと思われる。〕

惟人氏 「あんな女性と結婚したら、かなわんな、家がひっくりかえる。なんでもクツなんか100足とか200足とか、もっていたといわれたからな」と笑いながら、いわれた。〔清人氏の夫人、笑いころげ

る。これは照れかくしで大げさにいわれたのか、その辺は不明。私はあとで垂土氏にきいてみたが、そんなぜいたくはお袋に全く関係がないときっぱり否定された。垂土氏曰く、「お袋のぜいたくとは、極上のものを一点とか二点とかを持ち、それを古びても長く愛用するていのもので数をもつことなどは全く論外だ。』」

惟人氏 「籌子さんにはいろいろとお世話になったが、とくにソ連からひそかに帰国して富本さん〔富本憲吉、一枝夫妻〕の家を紹介してくれたのが籌子さんで、そのお陰で1カ月位か、そこにかくれて〔党からの〕連絡を待ちました。外国語学校の系統から全く離れているので籌子さんのお陰で官憲にもみつからなかったのです。夫人の一枝さんはぼくのことを知っていたが、憲吉のほうは医学生という触れこみを信用してくれていました。」

〔それは、富本さんの東京は祖師谷の家なのですか？〕

惟人氏 「そうです。」

「それから、かの女はぼくの妹の秋子と仲がよかったようです。」

「自分はこれまでは当面の問題に追われて、監獄で勉強したことを整理できなかったのだから、それらを整理したい。中国哲学の中の弁証法の問題や花鳥風月がなぜヨーロッパで消えてなくなったのか、印度、中近東、ギリシャまでにそれはあって、その向こうで消え去ることを問題としたいと考えています。ヨーロッパには花ビンの花はあるのですが、全体としての花鳥風月がない。なぜ、そうなったかを論じたい。」

「それにしても刑務所という所はいろいろの勉強ができる所です。札幌刑務所にいたとき、殺人犯の男がいた。高松出身の人でした。その人は刑務所で自殺したのです。」

屋島や栗林公園の話をしました。私がお貸しする高度な書物を次々によみこなすのでびっくりした。

すぐ横にスタルヒン〔プロ野球の投手〕の父もいたのです。かれはノイローゼで獄の壁に頭をぶっつけておりましたが、その音がぼくの部屋にもきこえてくるのです。のちに関西に移送されたとききました。

刑務所というのは面白い所で、どんな鍵でもあける男がいて、刑務所内の故障した鍵をあけるために刑務所側から手伝いをさせられるといったこともありましたね。」

惟人氏 「それから、自分がうけとった手紙は籌子さん以外にもいろいろありますが、時間がなくて、整理ができていません。惟郭（これひろ、父親）の手紙が随分とあり、父の全集か何かをだすので東大の先生が見ていますが、まだ半分もおわっていないようです。籌子のはこれで全部です。あなたからの依頼で、全部にあたりました。」

「籌子さんはね、ぼくが入院した北里研究所の養生園に一度だけ見舞いにきてくれましたが、そのとき、化粧の仕方がまえとちがっていて、厚化粧でしたし、また髪の色もあんまり、いい気持がしなかったのです。それに、かの女のほうはぼくに対してもう冷（さ）めていたと思います。しかし、当時のぼくは、かの女のほうにどんな病状だったのか、全然知らなかったのです。」

〔これは蔵原がとくに積極的に述べたもので重要事項に属する。惟人氏がかの女に“わかれ”の気持を抱いたことをぼくにとくに伝えたかったものと思われる。〕〔と同時に山崎の感想としては、当時のかの女も結核で病状は重く、このふたりが結ばれても共倒れにおちいり、関係者に迷惑のみを及ぼし、垂土も不幸となるので、かの女のほうでも蔵原から撤退すべく、ひとつには惟人氏の好まない拳にでたのではないかと推定される。ふたつには推定ではあるが、厚化粧や髪型の変容は

病気悪化による憔悴の外見をかくす意図もあったのではないか。]

私はこの日、午前10時30分から午後2時30分まで清人宅に滞在して、惟人氏、清人氏とその夫人の三人からお話を伺い、ある哲学者（古在由重氏）と昼食がてら会うためか、惟人氏は正午に席をたち、私は妻である中本たか子の用意されたおすしをいただいて午後となり、あとは専ら清人氏夫妻から話をきいた。そのお話しでは、惟人氏は過去の結核の手術による肺臓の縮小とか官憲の仕打ちによる打撲障害とか長年の過労による体調の悪化と、そこに老化が重なり、人との談話は1時間程度、2時間に達すると、疲労ですぐ横になるということ、惟人の伝記をかくためにスミスさんというアメリカ人が1週に1回、定期的におみえになるが、1時間程度できり上げるということだった。しかし、私は外見は元気であり、病者という風貌はなかったとお見うけした。外出なども自由にできているし、歩きぶりも健康そのものにみうけられた。

今回は種々の経緯をここですべてをかきつくす余裕がない。じつはこの面談の前にやり取りのすべてを清人氏とおこない、籌子の惟人宛の手紙の大半の「コピー」を、初めて清人氏からぼくに郵便で送られ、残りは東京の折にわたしたいといわれていたし、来宅はまず自分のほうにおでまし願いたいということだった。その詳細は別の機会に従来の聞き書き同然のスタイルで公表したい。

ところで、お礼をのべて辞去したあと、どうにも釈然としない（私が質問できない形をとったこと）し、大切なことを聞き洩らしたとの思いがのこったので、直ちに山崎功氏宅を訪れて蔵原氏とお話しができたことを報告しつつ、そうたびたび上京もできないので、一兩日のうちに、もう一度、蔵原氏宅を訪れたいこと、それを私自身が惟人氏に願ってもよいかと相談した。それはやってもよいし、やるべきだ、との意見をもらったので、清人氏に電話をして、さいわいにも三日後の11月13日に再訪、午前11時から午後4時30分までお会いできることになった。その折のお話は要点のみでもかなり長文になるし、まとめるにも時間を要するので、今回は最も重要なことのみを走りがきとして以下に記録しておきたい。〔 〕は私の質問と解説である。

〔かの女に最後に会ったのはいつでしょうか？〕

惟人氏 「1941年1月頃かと思います。自分は1940年10月に出所して、ビフテキを久方ぶりに食べ腹具合が悪くなり10日位家にて、北里研究所付属の養生園にはいりました。結核で熱がありました。翌年の1月頃、それがさがりはじめたのですが、そのときです。会いましたのは。そのときの印象は先にもいいましたが、服装、態度もけばけばしく、あまり感じがよくなかった。昔の籌子さんとはちがうとおもいました。ぼくはベッドから起きて座って話をしました。ぼくのその折の療法は体を動かし、運動がてらの療法で、養生園の庭を散歩したりしていました。籌子さんの感情はなぜか冷（さ）めていたのです。」

〔その後は一度もあっていないのですか？〕

惟人氏 「はい、一度もあっていません。」

〔お葬式には？〕

「これもぼくの病気が再発して行っておりません。ぼくの電報は読まれたときいています」〔葬式のプログラムには、蔵原が生前の籌子について話をするようになっていた。〕

〔最初に籌子に会われたのはいつでしょうか？〕

惟人氏 「これは1928年です。私共が国際文化研究所を上落合にもち、そこに小川（大河内）が妻君と住み、永田一脩が二階に住み、自分が研究所に家から通っていたときです。そのとき、小林多喜二か立野信之かに籌子さんを紹介されたのです。しかし、籌子さんとゆききをしたのは、もぐってから



だとおもいます。]

[この後に重要な回想がつづいたあと、蔵原のかくれ家に箒子さんがやってきて惟人氏を待っていたとき、箒子さんが特高に逮捕されないか、と心配した状況を近辺の地図をかいいて説明されたが、ここでは省略する。]

[かの女から愛情を告白されたことはありますか?]

惟人氏 「ぼくが逮捕されて各警察署にタライ廻しをされている時分に、母〔終子〕を通じて一枚のメモがかの女から届き、愛情が打ちあけてありました。だから、それは1932年のことです。かの女は面と向かって愛情を打ちあける人ではない。そこの所が大変、かの女らしい。]

[鎌倉の家へ行ったことはありますか?]

惟人氏 「ありません。」「鎌倉は知義と箒子の疎開先であり、箒子はそこで重篤な結核により死を迎えた。]

[『白夜』にかかれていことに真実性がありますか?]

惟人氏 「真実性が多い。フィクションというものではありません。村山は、みずからの転向に対比してぼくのことを対照的にえがくことになったのです。]

[きわどい質問で申しわけないのですが、かの女の気持ちはよくわかりましたので、先生のかの女への気持ちはどうであったかをできうればお伺いしたいのですが……]

惟人氏 「いまもいったように、最後にお会いしたときのケバケバしさにはよい気持がしなかったし、そのとき、かの女のほうも冷（さ）めていたのです。しかし、ぼくがあのようによく長く監獄にいなかったら、〔かの女と〕結婚していたかも知れない。」「このことを蔵原はさりげなく、恥づかしさをこらえてはっきりとのべた。これは亡き箒子のため、また、山崎のために、漸く明らかにしたものとはよく理解した。そこに具体的なことばはないが、逮捕された前後のふたりの愛情の昂揚ぶりを感得するのに十分である。蔵原のような思慮ぶかい慎重な人物が78歳のとき、その向うの母屋に妻の中本たか子もいるという場所で、こう述べたのである。]

[父の惟郭や母の終子は箒子さんをどうみていましたか? 村山の妻である箒子、亜土という息子の母である箒子、つまり人妻のかの女が独身の息子の世話を焼き、愛情を抱いていることに心配はなかったのでしょうか?]

惟人氏 「父親はかの女を大変可愛がった。大体、父親は利巧で気が利く女性を好んだのです。また、かの女が清潔一点張りのひとで、いまにいう不倫などをきらうひとだったから、そんな心配など全くなかったのです。」「母の終子は、箒子の愛情告白のメモをそのまま逮捕された息子に手渡す位だから、そんな心配などとは無縁ということを蔵原は示しているともみえた。]

[箒子のメモに対して、どんな返事をなされたのですか?]

惟人氏 「これは捕まっているぼくが今後どうなるかが全く不明であるため、責任ある態度は一切とれないので、それに対しては全く沈黙するほかはなかったのです。」「獄中の蔵原は箒子の手紙とか支援にはその後も、こころよく応じてきたのだが、愛情告白への返答自体はおこなわなかった。]

この日の聞き書きはこのほかにも重要なことがあるし、10日に述懐されたことの、より詳細で具体的なお話がつづいたのだが、紙数の関係で次回にゆずりたい。

最後に二、三のことを述べて終わりたい。蔵原は蔵原惟郭と終子の第5子ながら長男と三人の姉がいて次男とされている。母の終子（しゅうこ）は北里柴三郎の妹、父の惟郭は普選運動の代議士であり、大物の政客ながらリベラルで息子、惟人の信條と生き方、その非合法政党に理解を示した人としても有名。惟

人はその容貌、たたずまい、物腰、その類まれな知性と徳性から、いつも近辺の女性から例外なく憧憬の的となったが、籌子を例外として、他の女性のすべてに一顧だにせず、文学活動と非合法活動に専念、入獄後も非転向で過ごし、実質8年半の拘留で満期を迎え、1940年10月11日に出所。在獄中、1936年に肺結核が再発、病監にはいり、39年9月22日に終子の危篤で刑事ふたりと病室の母を見舞うが、翌23日に母は死去（葬儀への参加は知義の場合とは異なり、すべて不許可）。翌年の出所の折も重病で担架で運ばれ、「年譜」によると、「直ちに」麻布の北里研究所付属病院養生園に入院（一部は既述）。「医師から年末までもたない」といわれたという。「41年の1月頃から快方に向かい、4月に退院した。」籌子が養生園に入院中の惟人を訪ねたのはこの快方に向かう前後の1月のある日だった。惟人の「年譜」の1940年の項に養生園に入院中「作家中本たか子の看護をうける」とあり、41年の項には「5月 中本たか子と結婚、練馬区下石神井1-231に家居」とある。籌子は翌1942年2月14日、知義宛の手紙で「今年の夏頃聞いた話ですけど、中本さんと結婚するとかという、うわさがあります」とかいている。いかに蔵原の結婚が友人に公知されず、籌子の情報が一年以上もおくれて夫になされ、中身もあいまいなものだったかが分かる。養生園での中本の看護が籌子の見舞の前か後かもわれわれにはつよい関心がある。病状から前であった可能性は高いし、後はもちろん頻度も増えたと思われる。作家中本たか子には申し訳ないことだが、惟人の友人たちはほくに対して、かの女は「押しかけ女房」だとくりかえしいい、蔵原を囲む親友の会（葵会）には夫人同伴が常連の慣習（ならい）だったが、中本は粹な雑談の会とかいうものが嫌いで出席しないことを常とした。それは友人たちには蔵原の後背に、いつも籌子の姿がみえかくれしているのだと真面目とも冗談ともつかぬように私に語ることで理由づけられたりもした。

私は中本をおとしめるために、これをかいているのではない。かの女のいくつかの本格的な作品をよみ、真面目な人柄をきくたびに、じつに真当で真剣であり、駄洒落に付き合うなど御免（葵会での惟人の妻は私でなく籌子なのよというアイロニーをふくむ）、そして駄洒落より戦闘ですという気持ちは十分に分かるのである。

また蔵原の友人、山崎功は惟人の無口説について「あまり知らない人には用心しているのかしゃべらない」が、「親しい間柄だと駄洒落ばかりです」（山崎功『わが回想』同時代社、1983年、209ページ）とかいている。惟人氏は初対面の私に対して駄洒落ばかりであったのは私を親しい人とみなしたことだと知り、感銘をあらたにした。しかし、紙数の制約から、その駄洒落ぶりの会話を活写することはあえて避けたことをおこわりたい。

なお、葵会は30年以上つづき、熱海の大柿社（舎）をはじめとし各地の山荘や旗亭に一泊とか二泊して、すごしてきた長い歴史ときびしい体験を通して文学、芸術談義や世間話に身を焦がす粹な友情と連携の会であった。

上記にしるすことのできなかつた重要な一事をかき留めておきたい。それは惟人氏が重病で担架で8年有余を経て満期出所したとき、籌子は迎えに行かず、惟人はがくぜんとしたといわれている。かの女は自分の重病のゆえに行けなかつたのだが、その病気の篤さについて、養生園に蔵原を見舞った最後の出会いの折にもみずから語ることはなかつたことである。

籌子と惟人との外形的な関係をかき添えれば、かの女は救援活動家として主に治安維持法で捕まったナップ活動時代の友人同志、夫の知義、山田清三郎、小林多喜二、中野重治、鹿地亘、惟人、杉本良吉、壺井繁治、滝澤修、立野信之らを差し入れその他の方法で救援（これらは合法面中心）、そのなかでレポ役（非合法と合法とをつなぐ役割）は惟人のみであったが、例外として小林の専任レポだった鹿地に、小林と籌子の双方が頼んで（小林は活動の周囲に籌子のような純心で気が利く詩人のインテリ女性がいな

いので、とくにかの女を非合法の生活で懐かしく思った)、レポそのものではないが、レポの場面に立ち会ったし、小林の最後のかくれ家を勇敢にも籌子は世話をしたから、正式のレポと云う側面がある。

籌子が工面したかくれ家はすべて官憲に知られることがなかった。小林の逮捕は潜入スパイによるのであって、かくれ家によるのではない。惟人への合法の救援では、惟人の留守宅に自由に入出入りして、差し入れ本の選定に専心し、計画的な読書と学習を獄中で行った蔵原の生活を支援、また惟人の出版活動（娑婆と獄中の両面がある）を応援、これに協力した。それらは『プロレタリア芸術と形式』（天人社、1930）以下、15点に及ぶがかの女の実名があとがきなどで明記されたことはない。それらのなかでは、『プロレタリアートと文化の問題』（鉄塔書院、1932）『芸術論』（中央公論社、同年）、『蔵原惟人論文集』（作家同盟出版部、同年）、『蔵原惟人書簡集』（作家同盟出版部、1933）、レールモントフ『悪魔』（改造文庫、同年）、ロシア短篇集『五月の夜』（改造文庫、1934年）、『蔵原惟人・書簡旅行記』（文化集団社、同年）が重要であり、とりわけ『書簡集』、『悪魔』、『五月の夜』、『書簡旅行記』は籌子が全面的に協力して出版された本であった。『書簡集』の大半は籌子宛のものであり、第2次大戦後、『芸術書簡』として名を変え拡充され、蔵原の令名を江湖に知らしめた本である。しかし、その裏側にある籌子の惟人宛ての書簡はいまだ公表されていない。上記の私の訪問の際にその現物のすべてを手にとってみたのであるが、本来は村山知義の手元にあったはずのものが、蔵原の要請によって送り主に返されたのであろう。惟人氏と清人氏のご好意によってそのコピーのすべてが私の手元にあり、著作権をもつ生前の垂土氏から私がその全文を公表することはゆるされている。

なお、惟人の『年譜』は蔵原惟人著『文化・人・読書』（光和堂、1972年）、父の惟郭については『現代と思想』6、1971年12月刊に「父を語る 蔵原惟郭のこと」にくわしく記録され（そこに「我が児を誇る」『中央公論』1931年6月号も再録）、いずれも信憑性のつよい資料である。蔵原にその母を通じてメモをとつた籌子が1934年に発表した名作「お猫さん」シリーズは、実名は当時の婦人之友社への迷惑を避けねばならず、筆名を古川アヤとしたが、それは蔵原の筆名、古川莊一郎の「妻」にあやかるものとみられる。この事実を全く知ることのなかった晩年の惟人は私の報告に、ことのほか感無量の面持であり、感慨ぶかけであった。しかし、蔵原の「年譜」類には、籌子の名は全く登場しないし、たまさか登場しても連絡者（レポ）、救援者としてであって、こうした籌子との、ふかい個人的な、あるいは人間的な関係は記されることは全くなかったし、いまもない。

## 村山籌子

—— 続 ナップ時代の友人による（4） ——

話し手 原泉 中野重治

### （前言）

本来は中野重治とその妻、原泉（いずみ）女優、本名は原政野（はらまさの）、戦前の芸名は原泉子（せんこ）、中野の妻としては中野政野、（あるいは中野まさのとも記された）について紹介すべきところであるが、両名とも比較的によく知られた人物であること、私にそれを改めてかく余裕がいま欠如していることもあり、籌子との関係の限定された部分のみを必要な限り、述べるにとどめたい。

籌子と中野夫妻とは1930年代の前半はとくに親しく、原泉と籌子とのつきあいは籌子の人生を語る上で、とりわけ重要である。そこに中野重治も加わり、この夫妻との交流をとり上げることなしには籌子の



伝記も評伝も成立しえないのだが、元々、政党（戦前戦中は非合法政党）を一にして同志でもあった村山知義と中野重治の、戦前戦中の「転向」問題や生き方のちがひ、戦中の知義は日本を脱出して朝鮮に赴くという事態の評価（「亡命」か「逃亡」か）、さらに戦後における政党をめぐるあるいは党内における両名の個人的でない角逐と対立という次から次への、いわば公的な不和と衝突の中で籌子をどう位置づけるか、これは至難の業であり、私の筆は重い。聞き書きとはいえ、何をどう表現し、どう伝えるかは容易ではない。

しかし、生前の知義は籌子の親しかった友人知人について私がつよく問いただしたとき、原泉と中野重治の名を挙げ、「いま自分がかれらに会うことができない」としながら、言外に私に対し、かれらは籌子と個人的に親しかったから、会えば籌子についての貴重な思い出をきけるという無言の保証を与えたように思う。知義のざっくばらんな、あっさりとした第一義的な性格の一面と籌子の評伝への期待を私は感じた。

私は中野と原の自宅（世田谷区桜）へ6回訪問し（1972年10月25日、10月27日、1973年8月25日、11月11日、1978年2月25日、1980年11月12日）、原と電話にて2回（1978年2月23日、6月9日）連絡しあった。いずれも重要な情報に充ちており、籌子評伝に欠かすことのできないものである。

中野宅訪問のきっかけは知義の籌子をよく知る友人（親友）だったとする述懐のほかに、具体的には次のようなことがある。

私は同人誌『讃岐文学』19号別冊（児童文学中心の童謡ちゅうりっぷ特集）1971年7月発行に「ある童話作家——村山籌子のこと——」という一文を寄せたのだが、これが計らずも全国誌『日本児童文学』の同人誌欄で注目されて同誌にそのまま転載され、知義の私への慇懃もあったのでこのコピーを中野重治に送り、いくつかの質問状をしたためてみた。原泉の後の回想からすれば、その頃の中野は自らの全集の仕事のほか、さまざまな事の処理で誰かれに全く返事をしない緊張した超多忙の時期であったにもかかわらず、見ず知らずの私に対して返事をかかれ、質問状にも、要点のみではあったが、一々、回答を記してこられ、籌子については自分よりも妻の原のほうがさらによく知るが、原は手紙とか長い文章とかは不得手なのでかかない、話は一杯するから、上京の機会があれば原がしゃべるだろうという趣旨の、ありがたい手紙であった。

これまでの私の聞き書きはできる限り数回分をまとめるとか、手紙や電話など他の手段によるものもそこに融合して全体として分かり易く記録することに努めた。しかし中野と原の聞きとりから、あまりにも時間を経た現在、まとめようとすれば潤色のはいる余地が多く、あえて今回は聞きとりの日付に従って個々に誌すことにしたい。そのために、くりかえしが多く、よむ側でまとめていただく必要がでてきそうではあるが、むしろ、そのことで語り手の強調したいこと、思い出として不変で重要なことなどが分かり、利点もあるのではないかと考える。

以下Sは重治、Iは泉、y山崎である。

#### 第1回 話し手 原泉 中野重治（ご自宅にて）

1972年10月25日

y 最初の出会いは何年何月でしょうか？

I それは1930年（昭和5年）のこと、4月16日に共産党同情者事件（いわゆるシムパサイザ一事件、党のために資金を集め支援する人たちを一斉に検挙した事件）が起き、中野や村山知義が検束されて豊多



摩刑務所に収監され、それぞれの妻である原泉と村山籌子とが差し入れなどの必要上、刑務所に出かけ、そこで顔をあわせたのが最初の出会いです。[知義1901年生まれ、中野1902年生まれ、シムパ事件ではそれぞれ5月20日、5月24日逮捕、釈放は12月22日、26日、1932年コップ事件で4月にそれぞれ逮捕、34年懲役2年執行猶予5年と3年の判決という具合に、じつにパラレルに進行したので二人の妻の出会いもまた深まって行く。]

中野も村山も同年の末に保釈で刑務所から出ました。

y その後はどうなりましたか？

I 翌31年に自分たち、中野夫婦が上落合に引っ越したのです。そこは村山の例の三角の家から歩いて2分もかからない近くでしたから、急速に関係が深まりました。原はいつも現金がなく、生活のために20銭とか30銭とか、籌子さんに借りに行くという日々でした。

かの女は自由学園で学んだ教えを私に説き、予算生活が大事だというのです。しかし、こちらはいつも金がないので「何が予算だ」と切り返すのですが、ともかく、相互の欠陥を両方が意識してつきあうことになりました。

籌子さんは知義の母と同居しており、その母は熱心なクリスチャンで、籌子さんが古いといってゴミ箱に捨てた食べものを拾って、それをお母さんがもったいないとして食べるのです。籌子は困惑していました。私たちがベルを押して訪ねると、その母が出てきて最敬礼をします。それは時間の長い長い礼でした。しかし、それは嫁いびりというのではなく、お母さんの真情でした。食事のときのお祈りにしても深く長く、大変だったようです。籌子さんは食事に時間がかかるのは好まなかったのです。

y 1932年4月の再検挙があり、満2年後に出獄しました。ここで転向問題があり、村山は大同団結を提唱、1940年までつづいた新協劇団が生まれました。

S [口をはさんで] 近藤忠雄氏という眼科医がおられ、新人会のメンバーでした。治安維持法で捕われ執行猶予か何かになりました。かれは共産主義をもうやめたとしたのです。籌子さんがそのことに腹を立てたのです。[これは籌子の当時の人柄を具体的に証言するために述べたと思われる部分]

I 劇団には佐野碩（1905-1966）がいて日本から脱出し、フランスからソ連、さらにメキシコに行き、そこで死ぬということも起きました。かれは佐野学の甥で父は精神科の医者、その長男でした。

また二人の演出家、指導者の久保栄と村山知義が劇団にはいて、両者間に意見の対立もありましたが、一応まとまっておりました。

y 籌子さんとのつきあいとか、その後の夫婦としての知義と籌子との関係を教えて下さい。

I トムが逮捕されて家にいないという苦しい時代に籌子さんは私を求めてきました。それは昭和7年（1932年）から昭和10年（1935年）位まででしょうか。原がいないときは別ですが。その頃、籌子さんは知義との夫婦関係を拒否していたのです。夫婦のことですから、中身には立ち入らないことにしていましたが、籌子さんに同情しておりました。文学や芸術の革命を志する者の夫婦としてはおかしいと考えておりました。

y その後はいかがですか？

I 昭和15年に私（原泉子）が4カ月間検挙され、検事調があり、同年12月に釈放されました。覚えていることに、当時、東和商事によるフランス映画の試写会に籌子さんに行きましたが、検事とその映画の話をしたことです。

私はPCL株式会社（東宝が母体）にも出演できなくなりました。

トムさんは未決まで行きましたが、のちに朝鮮に行きました。

[知義の逮捕、入獄は3度あり、2度目の1932年のもの（2年間の懲役）は先述。しかし3度目の1940年のもの（2年間の懲役）はここでは触れていない。判決は1944年、朝鮮行は1945年3月である]

y 2度の東京空襲後、ひとりで留守居の籌子は小田急沿線の鶴川に疎開しました。そこを尋ねられたことはおありですか？

I 行ったことはありません。

y 鎌倉へはいかがでしょうか？

I これは2度だけですが、行きました。死に病<sup>やまい</sup>とは思いませんでした。

1945年6月に中野が兵隊にとられました。こちらは疎開する金もないのです。人との行ききですが、原は1940年から、中野は1937年から「危険人物」（要保護監察の人物）とされ、人を訪問すると、その人に危険が及ぶので尋ねたり、つきあったりすることはつよく遠慮していました。籌子さんとも同様でしたが、かの女のほうがかたまに現れるので、こちらがヒヤヒヤするのです。

y 鎌倉行きのことをお話下さいませんか？

I 私は有楽座で「太陽のない街」に出演しておりました。多忙をきわめていたときです。

そのとき鎌倉の籌子の様子がおかしいとの知らせがありました。

そこは新協劇団の演出家で経営者であった陣ノ内鎮が借りた家で兵隊帰りの宇野重吉がころがり込んで、陣ノ内の借りた家に、まずは村山の家族、次に宇野の家族が同居し、3世帯が同一棟に住んでいました。村山家は病気の籌子のこともあり、2階の一間に住むという窮屈な状況です。

原は多忙ではあったのですが、病気が重いというので有楽座公演中なのに鎌倉に出向きました。衰弱した籌子さんをみてびっくりしたのです。徹夜で話をしました。かの女は「原さんはどんな重病をやっても中野さんが治してくれる。自分は病気が軽くても治らない。私は絶望的なのです」という。他人が家庭内に、どこまではいりきれぬかが問題です。

私は富本さん（一枝）に相談し、どこかの病院にはいるか？ときく。本人は「はいる」と答えました。かの女がかわいそうになった。

原はかつて栄養失調もあって肺浸潤〔肺結核〕となり、2年間療養しました。富士見高原で1938年から39年にかけてのことです。治療に専念できましたし、安田徳太郎先生がタダ同然で診てくれました。そんな私と較べて籌子さんはかわいそうでした。

私が睡気ましにお茶が欲しいというと、トムさんが上等の玉露を出してくれました。日頃の通りにお茶を沢山入れて飲みました。トムさんが別室で寝たのですが、起き出してきて、原はどこから飲んだか？ときく。お茶の葉っぱが一杯だったためです。ギリギリ一杯にまであったからです。トムさんは籌子が医者のおすすめのあるムスビを食べず、高価な薬ばかりをのんで、といました。翌日の午後退室し、東京に帰りました。

y 籌子さんは8月4日に亡くなりましたが……。

I 亡くなったニュースをきいて富本さんといっしょにかけつけました。2日位、鎌倉に泊まったかも知れない。再建新協劇団の大阪朝日講堂での公演中だと思います。旅先の村山知義に「籌子さんを殺したのはあなただ」と私が指をさして、いうと、「その通りです」とトムさんがふかぶかと頭を下げたのです。

原は昭和28年（1953年）に村山知義と対立して、この劇団を出ました。

トムさんは籌子さんの葬式の日急にワーワーと泣いて、あとはケロツとしているような形で、まことにあっさりしておかしいと思ったのです。あんなにワーツと泣いてケロツとするのは怪しからんと思いました。

トムさんについて怪しからんと思ったことに女性のことがあります。劇団内で他人の恋人を5円でもらいたいという所がありました。それは冗談でなく、もし男が5円くれといえ、5円を出して実際に女性をつれていくのです。

[yは垂土に父親の女性問題について訊ねることを長く考えてきたが、訊ねあぐねたあと、晩年の垂土にやっと機会をつくって聞くことがあった。いいたくない態度は示したが、くりかえし、これを問いつづけ、籌子評伝の上でも大事なことのひとつだというと、やっと「親父は性について病的だった」と弁護的につぶやき、「だらしなさ」というより「病気」だといいたげだった。生前の垂土はいつも自分はお袋似であって、親父には似ても似つかぬ（似ているところは全くない）を口ぐせとした。『母と歩くととき』でも知義については全く筆にすることを避け、逃がっている。山崎のみる所、垂土の背たけや歩き方など、外形的には知義に似た所があるが、性格とか知情意の側面は似ている側面はすくない。] [なお、原は何度も「太陽のない街」の上演期間を正確にしらべること、をくりかえしいい、その場で松本克平に電話してきき、判明した。それについては後記する。]

[ここで中野重治が改めて加わり、重治中心の聞き書きとなる。原も脇に同席する。]

y 『少年戦旗』についてお話下されませんか？

S 子供のための読みものですが、籌子には子供のための一般の文学、また、そのプロレタリア文学について、日本のものに不満があったと思います。かの女が編集に参加したのもその理由があったからでしょう。

y 籌子さんの手紙について知りたいのです。

S 富本〔一枝〕さん宛のものは、富本壮吉にきいてみる。また蔵原惟人がもっています。村山に口添えしてもらって読まれるとよい。

y 『コドモノクニ』にも作品があるようなのですが……。

S これは調べると分かる筈です。

y 籌子のトムさん宛の手紙にS・F・とある人はどなたでしょうか？

S 佐々木茂策の妻、佐々木ふさです。旧姓は大橋、おかっぱのはしりです。籌子もその仲間でしょう。ぼくは籌子さんの水着姿を知っています。グループで多摩川かに泳ぎに行ったときです。体のひきしまった泳ぎ向きの人だと思いました。

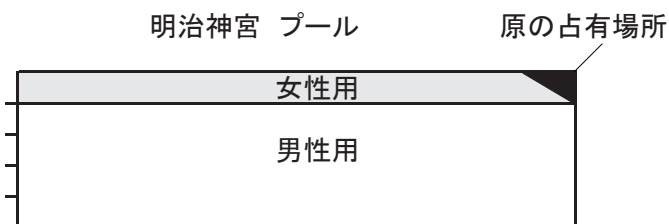
y かの女はおしゃれでしたか？

S 本当の意味のおしゃれですね。あでやかな華美なおしゃれでなく、一見じみですが、粋いきなおしゃれです。編みものが得意でヴォーグとかマッコールとかの編み物の雑誌を取っていました。俺と原の子供、中野うめ卯女、昭和14年生まれ卯女のために編みものをつくってくれた。その写真が今も沢山のこっています。[これですよ、といて原が写真をもってこられ、山崎はそれをみた。この写真の何枚かを山崎はゆずってもらい、持ち帰った。]

I お互いの亭主が留守（入獄中）のときに、原と籌子さんが交流したわけです。

明治神宮プールに籌子さんに度々連れてゆかれたのです。かの女は水泳の達人ですが、こちらは泳がないので、図にかくと、次のようです。プールの5分の1が女性用、斜線の部分で、その右端の隅の三角形の所が原泉子の場所だった。〔原の場所〕

S 水泳といえば、先にもいいましたが、プロ



レタリア作家同盟で多摩川かどこかに泳ぎに行きました。かの女は脇の下をそってきれいにしていた。俺はその肉体をみたが、大変びちっとしていて、泳ぎ向きのおもむきがあり、防水的でした。〔ここで原と中野が笑う。〕

蔵原にぞっこん、ほれ込んでいたことを全く知らなかった。村山と別れて、蔵原と結婚したかったのが籌子。これは純粹であったと思われます。村山はだらしなく、また、わがままな人。正直に自分がケチだといい、事実、村山はケチ。籌子は村山と別れて蔵原と結ばれたかったのです。しかし蔵原はうけつけなかったのです。

I 会費を払った会では、会費以上に飲まなくてはすまない人が村山知義。

S 籌子さんはやわらかく静かに人に接することに徹底していました。それだけに籌子さんは気の毒でした。党の必要で金を借りに籌子さん宅に行き、1円を借りたいというと、一銭銅貨で1円10銭貸してくれました。二人で数えてゲラゲラ笑ったことを今も覚えています。恐らくは、かの女は日頃、一銭をためておいたのだと思います。

かの女が蔵原と結婚しておれば大変だったと思う。〔誰がどう大変だったかは、今となってはよく分からない〕

I かの女はひとり静かにしたい方。お客をするのはきらい。何かあればペロッと食べて知らぬ顔をする方。いま生きていたら、私の家にべったりと、入りびたりするだろうと思います。

S トムは自分の母、元子と籌子さんとの関係から逃げたのです。知らぬふりをしていました。しかし、一方的に知義さんを非難できない面があります。

I 籌子さんが岡内家に頼んでトムさんに投資していたのではありませんか？

S 俺には誰も投資してくれてない。(笑い) かの女に童話とか童謡とか、子供のためにかく時間をもっとあったら、よかったと思う。本当の空想家。空想の生まれ方がほかの人とちょっと違う。ぷーっとうかぶのがよい。

I, S 〔異口同音に〕 籌子さんは1931、32年頃まではトムさんを「お兄様」と呼んでいましたが、34、35年以降は「ちょっと」に変わりました。〔知義への夢がさめた時期の問題にからむとみられる〕

S プロレタリア文学を空想に充ちたものにしたいと籌子さんは考えていました。

y プロ芸術の哲学や評論をよみ、創作作品以外のものをよんだといわれ、また、それを身につけたといわれていますが…。

S プロ芸術の著書はえり好みしてよんだと思う。

y 多喜二の籌子宛の手紙は小林多喜二全集にも7点を数えます。しかし、籌子の多喜二宛手紙が全くみつかっていません。これは多喜二の生涯からみて、どこにもない、と考えるべきでしょうか？

S 籌子さんの多喜二宛の手紙はどこかにあるはずです。

y 籌子さんは元来詩人といわれ、トムさんも、籌子を詩人、詩人といわれました。これは童謡詩人というのではなく、詩人一般の意でした。私はそうした詩を探しています。

S 『婦人之友』の投稿欄に詩を寄せ、佐藤春夫の選で第1席となった、ややニヒリスティックな詩がありました。たしか子供のことをうたったもの。1926、27、28年頃と思います。

y 籌子さんの人柄について、人となり、について改めておうかがいするのも、どうかと思いますが…。

S 人に頼らない人。腹が減って金がなくても、人をたずねてメシを食うなどはしない人です。話をしているとき、人の眼をみない。大事な話でも眼をふせている。これは他人にはよい印象を与えないと思う。



箒子さんの仲間の中で、壺井栄（高等小学校）、佐多稲子（尋常小学校中途退学）、原（尋常小学校）という具合に女学校を出ていない人ばかり。佐多さんは箒子がきらいだったと思う。かの女をあまり知らないこともあります。そんな中で外国語がわかり、基礎的な教養を身につけた女性がかの女です。

S 宮本百合子は箒子を典型的な小ブルジョワ夫人とみていました。このことは何かにかきたいと思っています。

I 当時は箒子さんを活かす時代ではなかったのです。かの女のような人柄を活かす時代でなかったのが本当に惜しいことです。

〔話の途中、「太陽のない街」（有楽座）公演期間について松本克平に電話して判明。1946年7月3日から21日まで、ということ。Iはこのことをyに告げ、鎌倉への最後のお見舞はこの期間内であったことが分かる。〕

## 第2回 話し手 中野重治（ご自宅にて）

1972年10月27日

y 最初の印象をおきかせ下さいませんか？

S トムさんのほうを先に知っています。会合は村山の家であって、鹿地亘といっしょに村山家に行きました。佐野碩もいっしょだった。その折、スパイ容疑でイカサマの人間を除名したのです。随分、ひどいと俺は思いました。

箒子さんの印象は、いい人だなあーという印象、ハニカミ屋だなあーという印象、自分（中野）に好意を感じてくれているなあーという感じ、深入りしたくないなあーという感じ、時間の浪費、夢の国にいるなあーという印象です。自分に話しかけたり質問したりはしない。こちらは時間がない。〔ここで中野は関連して自分の政党との関係など当時の自分史を語られた。1927年から31年までのこと。その記録は省略。〕

箒子さんの印象は基礎的な教養があり、ブルジョワ文化のいいものをもっているという印象です。

y 原さんとのつきあいはいかがでしょうか？

S 箒子さんは原泉を好きだったと思う。箒子さんと原が夜帰宅すると路上でチンピラがいいがかりをつけて原がなぐられた。箒子さんが、あなた方がわるいのであって、こちらが悪いのではないといったのです。原はカーツとなるほうで、論理的に説明するほうではないのです。

y かの女の親しかった人で、あまり知られていない人はご存知でしょうか？

S 科学映画をやっていた東京シネマの俳優名、山内光、本名、岡田桑三という美男で俳優、経営もした人の、美しい奥様がおられました。この奥さんと箒子さんが親しかったのではありませんか？

y トムさんと箒子さんの夫婦関係について教えていただきたいのですが…。

S 箒子さんのほうが献身的でありました。村山はだらしがない。村山はこちこちのピュリタンに育てられ、第1次大戦敗戦後のドイツに行き、50円が1000円になるような超インフレのドイツで若いブルジョワで過ごしたのです。箒子さんはモダンだから、困り果てたのです。〔中野の述懐の意味は推定するしかない〕

夫婦のことは、資本家、プロレタリア陣営の対立とプロレタリア内部の問題があり、対立を触れないでおくことはできません。村山夫婦には運動関係と夫婦関係がからみ、複雑な悩みがあつて箒子さんにはカタルシス解消で童話をかいたことは絶無ではないと思います。

なんといっても、籌子さんには上品な所があり、また、かの女は、あそこに目標があるが、徐々に近づくということはできない。いきなり最終目標を出してしまうのです。

y かの女の児童文学についての意見あるいは主張は何でしょうか？

S 当時の日本プロレタリア児童文学に批判的でした。籌子の主張は空想性を入れること、これが第1。第2は階級闘争について、子供の世界と大人の世界とは異なること、子供の世界に憎悪を押しつけてはいけないと考えました。

しかし、日本の全体では、籌子さんの主張は少数派ではないが、組織内部では階級的憎悪が主眼だったと思います。なにしろゴソッと何度も検束されるので、こういう理論は打ち捨てられたのです。

こうした場合、かの女は自分の理論を構成して積極的に打ち出す人ではありません。人々に、ただ受けとめてもらえないかと思う程度です。

村山は妻に対しては適当にやってくれという姿勢でした。かれは演劇のほうで大変な任務があり、数十名の全体をまとめてゆかねばならない仕事がありました。劇団全体として政治的配慮がいくつもあり、ざっばくにならざるをえない面があった。

籌子さんは純粹無垢だから、二人のあいだに齟齬はありうることです。

y 香川の同郷に壺井栄がおられ、籌子とも『戦旗』の頃の知りあいですが、この兩人を比較してみて、どう思われるでしょうか？

S 壺井は土着的ですが、籌子は開明的だと思います。

籌子さんがトムさんを「お兄様」と呼ぶのですが、呼び方自体に自分はびっくりしました。

y 籌子を現在、しらべるところの意味についてご所見をうかがいたいと思います。

S 欠点もありましたが、いいことをしたことなど、はっきりさせるべきです。育ちからも人柄からもセクト主義の人ではない。それがセクト主義の真中で仕事をはじめざるをえなかったのが、純情にセクト主義をうけ入れもしたのです。しかし、それを子供のためには考えずには、考えなおさずにはいられなかったのです。このことが時代の流れで摘みとられてしまったのでした。

y かの女の、とくに獄中にある人への手紙についてどう思われますか？ そうした手紙は私信ですが、籌子の場合は「作品」に類するものと思うことがあります。

S 手紙は上手です。中身はまことにすぐれています。

y いまはその一部しか発表されていません。

S そうですか…。発表されていなかったとは知りませんでした。かの女のことを思うと、今の女性は一体、何をしているんだといたい。



(原 泉) (本名、中野政野)



(中野重治)

第3回 話し手 原泉 中野重治（ご自宅にて）

1973年8月25日

（前言）

この日はもっぱら夕食に招かれて午後7時30分から同9時30分まで、おごちそうにあずかり、その間のお話なので聞き書きというのは適切でないが、私にはその延長でもあり、各論の深まりなので、記録しておきたい。

I、S 籌子さんは自分の悩みをいちばん富本一枝さんに知らせ、打ちあけたはずです。蔵原への気持もいちばん富本一枝さんに打ちあけたと思います。富本さんは純粹の人です。1930年から31年にかけての頃に、籌子さんが重治・泉子の夫婦を富本さんに紹介したいとして、富本家に連れて行かれた。それがはじめての富本一枝さんとの出会いです。行ってみて、その家のたたずまい、部屋の調度品など芸術と陶芸の家中の香りでおどろいてしまったことが思い出されます。〔富本サロンともいわれている〕

〔富本一枝（1893—1966）は尾竹紅吉名で平塚雷鳥と共に青踏派で活躍、富本憲吉と結婚、陽、陶、壮吉の三人の子供を得た。陶芸家憲吉は人間国宝で芸術院会員、一枝は作家活動、評論活動に身を挺し、文化活動その他いろいろのことで人々を援助した。〕

S 中野『春夏秋冬』（筑摩書房刊）の114-122ページに「富本一枝さんの死」という俺の一文があり、そこに一枝さんの写真も入れました。一枝さんに打ちあけた籌子さんの蔵原への愛ですが、蔵原は村山と籌子さんとの結び目を切って、籌子さんと結婚するようなタイプの間人ではありません。

y 知義の『白夜』にある人物の筆名（仮名）に該当する本人の名前を照合させて下さい。

S それはよめば大体見当がつくように、木村は蔵原、松井は中野、のり子は籌子です。

y 全く予想の通りです。ところで富本一枝さん宛の多くの手紙、籌子さんの手紙もふくめて、富本さんは手紙をのこすと、みんなに迷惑になるからと、本人が死の前にすべて処分したといわれています。じつに残念なことです。また、生前の富本一枝さんに私が会えなかったのが一層残念なのです。富本さんの死去は私には早すぎたのです。その必要に気づいたときはおそすぎました。

S 生前に会っておれば手紙類でも心配をかけぬから、といえはみせてくれるとか、話をしてくれたと思う。それは甚だ残念なことです。

y 富本さんは童話をかいて花森安治さんが出版しました。作品の水準は高く、幼年童話よりも高度な内容ですが、籌子さんのなんらかの影響とか刺激があったのでしょうか？

S それは分かりません。よくよんで調べてみないと…。花森がなぜ出版したのかは花森に会ってきくこと。

〔このあと、陽のこと、陽と同一の職場にいた上司の松本正雄のこと、川口浩と松井圭子夫妻のこと、など話題はすすんだが、省略する。〕〔富本一枝については、高井陽・折井美耶子『富本一枝小伝・薊の花』（ドメス出版）、渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（不二出版）をみて下さい。いずれもうつくしく、こまやかな本です。〕

第4回 話し手 原泉 中野重治（ご自宅にて）

1973年11月11日

（前言）

この日は次のようなメモを準備し、児童文学のプロレタリア関係の動きを示す雑誌について、また、その子供欄の設定について発行または開始年月を確認した。Sは中野によるコメントを記した部分。

『無産者新聞』に「コドモのせかい」欄、設けられる。大正15年6月

↓

『文芸戦線』に「小さい同志」欄、設けられる。昭和2年6月。これには楨本楠郎、山田清三郎、藏原惟人が参加していました。(S)

↓

『前衛』（前衛芸術家連盟の機関誌）の「コドモノページ」欄（昭和3年1月創刊）プロ芸と文芸戦線が統一したものです。(S)

↓

『プロレタリア芸術』（日本プロレタリア芸術連盟の機関誌）

↓

『戦旗』（日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術家同盟の合同による発足。昭和3年3月発足の「全日本無産者芸術連盟（ナップ）」の機関誌）

↑

旧ナップ

『童話運動』（「新興童話作家連盟」による昭和4年（12号で廃刊）1月創刊のもの。）この童話作家連盟の創立は昭和3年10月である。

↓

『戦旗』（旧ナップ一部が「日本プロレタリア作家同盟」（ナルプ）として再出発。昭和4年2月）

↓

『少年戦旗』（昭和4年5月創刊。12号で廃刊。『ショウネンセンキ』にかわる。昭和6年12月にこの『ショウネンセンキ』も廃刊せざるをえなくなる。）

〔『童話運動』は『童話と社会』（新興童話作家連盟）を脱退した小川未明を擁しての自由芸術家連盟が結成され、その機関誌。昭和4年12月のこと。翌5年3月創刊である。〕

（旧ナップは昭和6年に日本プロレタリア文化連盟（コップ）に組織替え。）

y プロレタリア運動の文学、芸術関係の離合集散について、『文芸戦線』誌とか『プロレタリア芸術』誌とか、プロレタリア文芸連盟、プロレタリア芸術連盟とかとの関係をはっきり頭に入れ、かつ、人名と所属、執筆の関係をすっきり理解したいと思っています。

S プロレタリア運動の離合集散については山田清三郎のかいたものを是非みることです。

俺は『文芸戦線』に参加していない。しかしプロレタリア文芸連盟には加入していました。『文芸戦線』はプロレタリア文芸連盟の機関誌ではありませんが、両者は不即不離の関係だった。この文芸連盟の多数派が脱退して前衛芸術家同盟（藏原惟人）と青野季吉や葉山嘉樹のグループにわかれたのです。



俺は文芸連盟の少数派で、この少数派がプロレタリア芸術連盟をつくり、機関誌『プロレタリア芸術』を出すわけです。その前衛芸術家同盟とプロレタリア芸術連盟が合同して、ナップを結成するのです。

村山知義は前芸にはいったのが最初のものではないか、と思います。籌子さんが旧ナップにいたかどうかはトムさんにきいて下さい。

y 児童文学の理論はどうなっていたのでしょうか？

S 児童文学についての理論的研究はおくれていたと思います。

籌子さんは大人のためとちがって、子供には空想的世界があるのを大切にしなければならないとし、また、階級闘争には子供は間接的に参加しているのであること（直接的でないこと）を考慮しなくてはならないと考えていました。

I フスマ越しに議論をきいていまして、当初『少年戦旗』を籌子さんが批判したことがありましたので、はじめから『少年戦旗』に参加していたのか、どうか、と思う。

S、I 猪野省三は昭和8、9年以後は消息不明でした。運動から引っこんでいたと思います。かれはこれより先『プロレタリア芸術』（鹿地、中野、猪野など）の2巻2号に「どんだん焼き」を發表、いつのまにか童話を執筆するようになっていました。

S 籌子さんは一歩しりぞいたところでみる余裕が自覚してありました。

y 宮本百合子さん、佐多稲子さんは籌子さんをどうみていたのでしょうか？ 以前にも少しおうかがいしましたが……。

S 百合子さんは籌子さんがきらいでした。

I 稲子さんも籌子さんがきらいでした。しかし、原はいつも籌子さんを弁護しつづけました。百合子は自分自身の小ブルジョワ的なものを克服してやって行こうとつきすすんでいるのです。籌子さんもそうなのですが、百合子のように前向きでなかったので、百合子は籌子を好まなかったのです。学校を出ていない稲子さんは、自分の無教養と籌子のプチブル的な教養との差を感じたので、籌子さんがきらいであったと思います。

籌子さんは勝手な人です。自分がよいと思うことはすぐに人に押しつけたのです。電気掃除機を買えとか、時間の節約になる、ゴミをかきまぜるのでなく、ゴミをごそっと打ち捨てるとか、利点ばかりをいうのですが、こちらは箒も買えないのに。また、家を建てよ、とか、予算生活をせよ、とか、いいと思ったことをどんだん、すすめるのです。そんなことのできる金も余裕もない貧乏人にすすめる。こちらは反撥するしかない。

しかし原はその籌子さんに不思議な魅力がいつもあって、かの女を弁護したのです。

例えば、差し入れ本について、これはこの人にあげたほうがよい、自分の亭主だけでなく、他の人にも使えと、一々、仕訳する。教養があったので、ひとつひとつの本をよく知っている。どこで入手できるか、誰から借りられるか、どこでなら買えるか、どうしたら入手困難を克服できるか、アンダーラインがあると差し入れられないなど、次から次への難題を解決してゆくのです。原は目を丸くして籌子さんのやり方に感服しました。物かきで、他のことに忙しい百合子さんや稲子さんはこういうことを全く知らないのです。

人が逮捕されると、入獄した途端に、あらためて日頃、よめなかったものをいろいろとよみたいと入獄者当人は思うものです。文学者、哲学者、芸術家はとくにそういうことになります。しかし、ふつうの留守家族では戸惑いだけで、まにあわないので、籌子さんがそれに応ずるのです。中野の場合、原に

はよく分からないので、籌子がやってくれたのです。いつも。

あの人は刑務所の役人にもけっして、さからわない。板チョコを差し入れようとする、銀ガミがいけないといわれる。そうすると、差し入れない。

ところが原は銀ガミを取って差し入れる。原にも、あの人にないものがあるのです。お嬢さんのかの女は気がつかずにひっこむのです。

I, S 権力がこわいのでなく、育ちだと思えます。百合子は籌子さんが典型的な小ブルジョワ夫人であるといいました。それは両者が小ブルジョワ夫人であるから、百合子は自分のこととしてよく分かるのです。

I しかし、原としては、籌子には興味津々でした。かの女に対して何のイヤな気持ちをもたなかった。英語の本やその他の本でも、すぐにこれはこう、あれはこうといい、訳してもらって、むしろ興味津々で、ありがたい、ありがたいの思いのみでした。〔差し入れ中心の籌子や原の救援活動と佐多や宮本百合子の運動や活動のちがいが籌子評に関係があるとみられる。〕

y 稲子さん、百合子さんたちは物かき同士のつきあいですが、原さんは物かきでないので、何をいっても何をしてもかかれなくて心配がなかったのでしょうか。

I, S その通りです。

I それに籌子さんと村山との夫婦間の不幸な側面を百合子さんや稲子さんは知らなかったもので、籌子への理解度が低く、あるいは全くなかったといえますね。

籌子さんは教養がひろかったので本についてよく知っていて、原は目を見張って、いろいろ頼んだものです。

狂信的なクリスチヤンの村山のお母さんから、いつも原のところへ逃げて転がり込んでくる。柏木時代の昭和11、12年頃まで。そういうことも一般の人は知りません。百合子さんや稲子さんも。

y 以前に、籌子さんからお金を借りたことをうかがいましたが……。

I 落合時代にはお金をよく借りました。50銭をよく借りました。しかし、それは全部返したと思う。原は潔癖なので返さないではおれなかったのです。

〔ここで籌子についての聞き書きを中断し、籌子の中野重治宛の手紙文中、とくに山崎にとって不明部分、あるいは何をいっているのか分からない部分、手紙についての一般的な質問など、この機会しか、こうした質問ができないので中野自身の口からコメントをいただくことにした。〕

y 籌子の手紙はこれ以外にもあったのでしょうか？

S これ以外にも沢山あったが、福井の大地震で消失したか、あるいはどこかにまわしたこともありえます。

I 原宛にもあったかも知れないが、なくしてしまったように思います。

ある人にたのんでマックス・ファクターを買い、日本ではだんだん減ってきてまして、欲しいのは二、三種類ですが、ひとつひとつ、解説書（英文）をかの女によんでもらって、配分しえたことがありました。〔この思い出は籌子の手紙とどう関連するかは不明であるが、聞き書きのメモのまま再録しておく。〕

y 手紙の中に蔵原さんのシャッポとか帽子のことが出ています。どんな帽子でしょうか？

S それはソフト帽、いわゆる中折れ帽です。

y 手紙（私の整理ではDとF）には、ラジオ体操の話が出ています。これはどんな体操でしょうか？

S それは表現ではラジオ体操と書いていますが、本当はラジオ体操でなく、デンマークカスウェーデン

かのものです。

S、I いまの美容体操のようなものと思う。

y あのかけ声とは……。

S 「みなさん、朝のラジオ体操の時間です」という、ラジオなどからのかけ声のことです。

y 政野さんはまさのさんですね。

S 本名は漢字のほうです。

y 林さんとは……。

S 林房雄です。この籌子さんの判断内容はいまとなつては、卓見ですね。

y 差し入れの本の題名はお分かりでしょうか？

S 『槐多の歌へる』は分かりますが、他は手紙文から想像するばかりです。

y お体の具合がよくない、とありますが、どんなご病気だったのでしょうか？

S 特別なこととしては、分かりませんね。中野が病監にはいったのは昭和9年のはじめ、肺浸潤でした。しかし、この手紙では1930年から32年頃にかけて、とくに32年7月1日の消印にある「身体の工合がよくない」とあるので、そのことの記憶はちょっと分かりませんね。

y 上野さん夫婦とはどなたでしょうか？

S 上野壮夫さん。『戦旗』に関係し、作家同盟の仕事もやった。小説もかいた。この人については尾崎一雄の小説（『なめくじ横丁』）をよむと分かります。今は同人雑誌をやっている。花王石鹸の仕事もしたと思います。奥さんは小林多喜二について本をかいた小坂たき子さん。その本は昭和48年の夏に刊行されました。

y 川口さん、立野さん、亀井さんについて。

S 川口浩、立野信之、亀井勝一郎と思います。立野の最初の奥さんには籌子さんはへきえきしていました。俺も好きではなかった。

y 山内さんは……。

S 岡田桑三氏のことです。

籌子の32年7月1日の絵はがきの最後に籌子さんは体操の話のあと、「〔しない〕よりはましだから、おやりなさい」とかいていますね。人は何いってやがるんだと思うかも知れんが、俺はおもしろいと思ったのです。

〔ここで中野の政治的事件との個人的関わりについて中野とともに原が概略の述懐をおこなう。〕

I 1930年5月20日の一斉検挙で原が検挙され、はじめて留置場に行ったのですが、自分は23日か24日に出されて、入れ替わって中野が捕らえられたのです。自分は交換に出されたわけです〔妻を捕えておいて次に本番の夫を逮捕するという形をとった。〕中野は同年12月28日保釈されましたが、32年4月に検挙、以後、満2年間の懲役、34年「転向」という形で出てきて、執行猶予5年の判決、37年12月27日以降、執筆禁止、41年12月9日太平洋戦争勃発の翌日、治安維持法違反容疑で中野、宮本百合子の検挙のため特高がやってくる。百合子は検挙され、その折の日射病が百合子戦後の死因（の遠因）となった。保護監察中の中野は父の死のために福井に帰京しているとき、田舎にとどまり、春まで帰京せず、捕まらなかった。原は次の子供がお腹なかにあり、そのことで多忙であったのです。

中野は41年12月から45年まで不拘束のまま調べられることとなったのですが、呼び出しがあっても、なるべく理由をつけて出頭しないように努めたのです。何べんも呼び出しがあります。警察は協力の文をかかそうとする。それを出来るだけ避けようとしたのでした。〔中野はこうした原の説明に相槌

を打ち、同じ発言を原と異口同音に述べた。]

[中野は正午すぎに用務のため外出していなくなり、原泉のみの聞き書きとなる。]

y 籌子さんの医者のことを伺います。

I 私は医者は塚原先生以外の人は知りませんし、塚原先生についてもお名前をきいているだけで、私自身は塚原先生を全く存じ上げていません。

ある人を信用すると、かの女はその人のみを頼るところがあります。

y 咯血ということは肺結核によったのでしょうか？

I そういうことはないように思うのです。私ははっきり知らないのだが……。昭和9年12月、新協劇団の発足後に、原は翌年10月頃から、かの女とは一種「疎遠」（ということばそのものは当たらないのですが）になり、村山の家にはよく行くんですけど、芝居中心になり、籌子さんと個人的には繁くなくなったのです。[この発言は重要である。山崎には、籌子が病気のゆえに、引っ込みがちとなり、他人への感染とか、みずからの発病を人に知られたくないとか、療養に努めたいとかの理由がひそかにあったと推定され、原のほうもみずからの危険人物ゆえの配慮がその頃から自然になされた可能性がある。籌子の突然の咯血は昭和10年代のはじめである。]

新協劇団では久保演出で私はのびたと思います。村山演出では私はのびなかったので、村山は家では原はダメだと籌子にいったかも知れない。それに籌子さんが影響されたかも知れません。うのみにはしなかったと思いますが……。

籌子さんと原の気持ちがあわなくなったということは全くありません。しかし昭和10年頃から同19年頃まで、前にもいった理由で籌子さん個人とあまり深いつきあいはないのです。[この間に籌子の発病、療養生活、村山の母の死、村山の逮捕、籌子の孤独、童話執筆の中止、蔵原の出所と心の離別など、もっとも暗い時代に原と籌子とはつき合うことがなかったことになる。]

y その間につきあったと思われる人はどなたでしょうか？

I 昭和10年から同19年に、かの女が行ききした人はよく知りませんが、富本一枝とは会っていたのではありませんか。あるいは近藤きよさんとか)

しかし、次のようなことがありました。かの女が東京を焼け出されて鶴川に疎開していたとき、私も同じ小田急沿線の豪徳寺にいたのですが、そこに来られたことがあります。危険な人物を訪れる人はいないという時代にやってこられ、おどろきました。

私のほうは金のある人は疎開することもできるんだな、と思ったことです。[これは籌子さん個人への皮肉でいったのではない。なお、籌子の鶴川時代はトムさんは朝鮮に脱出して留守、重病でひとり住まいの農家の離れにいたときで、籌子の淋しさ極まる時代であり、「金のある人は疎開する」という表現は適切でない。鶴川時代をよく知るのは藤川栄子である。]

昭和15年に新協劇団が解散（させられた）となったのですが、村山はその後も稼いだと思います。[ここで新協劇団の後期に入団してきた清州すみ子さんのことにも触れられたが、省略。]

y 鶴川時代は1945年の二回の東京空襲後ですから、昭和20年です。19年頃までは、20年の敗戦以前頃までというのが正確に思います。

I そうです。往来の復活は敗戦後でしょうね。トムさんによる戦後の再建新協劇団には人が集まらなくて……。原はベタに出ています。それはやめる（原の表現では、すすんでやめたのではなく、トムさんがやめざるをえない状態に原を追い込んだのでいたたまれずに）までつづきました。

籌子との往来も復活はしても、こちらはいそがしいし、向うは鎌倉に移るとか、遠方になり、亡くな



るまえに1回きり行っただけです。有楽座で「太陽のない街」をやっていたときです。医者がすすめても食べないので「原君、食べるようにいってくれないか」とトムさんから、いわれました。亜土ちゃんからもいわれたかも知れません。

y 中野さんは鎌倉に行かれましたか？

I 行っていません。亡くなったときは行ったと思いますが……。

お通夜の晩には近藤きよさんもおられた。

亡くなるまえは一度きりで、何度もいうようですが、「太陽のない街」のとき、じっさいに暑いのに、かの女はあったかい服を着て、首には厚い布をまいて、ああ寒い寒いという場面がありました。寝ずに話をして、富本さんに相談して「いい病院をみつけてあげる」といったら、籌子さんはそれに従うといいました。そのとき、村山知義は眠っていたのです。

私があくる朝、ちょろっと眠ったとき亜土ちゃんが薬を医者からもらって帰ってきて、薬をあげたり、お釣りの金をひろげているのを覚えています。知義は首にシマ模様の財布をぶら下げ、それを受けとっていました。トムさんはこんな高価な薬を飲んでいるので食べなくてはいけませんと籌子にっていました。籌子は籌子で知義がおむすびをむりに口におしこむといっていました。

y いくつかの個々の点についてご質問させて下さい。まず、編んでくれた毛糸を着たお嬢さんのことです。ここにある写真、ご自宅の庭先の写真をみながら、おねがいます。

I 中野卯女は昭和14年2月1日生まれ、1歳か1歳半くらいですね。昭和15年か16年。

y そうするとその頃も全く往来がなかったとはいえませんね。

I そうかも知れません。上下の毛糸です。2枚くれましたが、あとの1枚は不明です。上質の毛糸を使っています。国産品でなく、ビーハイブという名の毛糸だったと思います。

y 卯女さんの帽子の毛糸も籌子さんの編んだものですか？

I それも籌子の編んだもの。毛糸の色はライト・ブルーです。(黑白写真なので色の識別ができない。)

y 犬が写っていますが、犬好き籌子さんの犬でしょうか？

I いいえ、原の家の犬です。卯女が可愛がっていた犬です。

写真の私が着ているのは壺井栄さんによるものかも知れません。それであれば栄さんの内職のもので。やっとな小説をかこうかという時期で、まだ小説をかいていない頃と思います。

y かの女の犬好きについて、ご意見をお聞かせ下さい。

I 動物が好きでした。自由学園的な合理主義があって、いわゆる家庭的な時間は好きでないから、子供は早く生んで、生活を満足させる上で趣味と実益をかねて犬を飼ったのです。

トムさんがいないので淋しいから飼ったのではないと思います。〔この最後のことは部分的に異論をさしはさむ人もあるであろう。〕

y 蔵原さんのことで、籌子さんの思いをお聞きになったことはおありでしょうか？

I あの方は「ああいうひとよ」といっていました。その意味はふみ切れない人よ、ということです。戦後、私が劇団内で村山(知義)と対立して、蔵原さんにきてくれと頼んでみましたが、それはそちらのことだとして、きてくれなかったのです。これは組織的にはただしいのですが、ちょっと優柔不断の面もでています。

y 籌子さんは潔癖な人で、蔵原さんとのことでも潔癖だったといわれています。その潔癖さについて伺います。

I その例のひとつに河原崎長十郎としづえさんのことがあります。しづえさんは小川信一(本名磯野信

威)と夫婦で子供もありました。想像では小川は家庭では暴君だったのではないかと、と思いますが、小川が刑務所にいたとき、しずえさんは長十郎と結ばれたのです。小川に較べればよい男にみえたでしょう。これに籌子さんは腹を立てたのです。私も同感でした。

y 着物姿の籌子さんをみたことはありませんが……。

I かの女は着物を着たことはありません。当時の私もそうでした。洋服一本槍ですが、外国のいい物を称讃しました。百合子や稲子はそういうことをきらったのです。きらうには理由もあったのです。しかし、原のほうは貧乏してもいいものはいいという気がありました。

y 籌子が童話をかきはじめた動機は何でしょうか？

I 『婦人之友』編集者時代からと思いますし、英語がよくできたから向うのもの、童謡とか童話とかを前々から、よんでいたと思います。しかし、私とのつきあいはずっと後のことですから、かきはじめた頃のことは分かりません。

〔山崎としては、かの女の性格と本心や知義が早く童話とか童画に手をつけていたこと、『子供之友』がすでに発行されていたこと、亜土が生まれ、育児の毎日であって、その亜土に童謡や童話で接したかったこと、大正の児童文化の渦中にあったこと、トムさんの実母が生活のためとはいえ、少女小説をかいていたこと、その他、数多くの理由が予想され、先述のカタルシスの解消もあって、その動機は多義に亘り、しかもその多義相互の関係、その時間的先後の関係、ロジカルなからみについてうかがいたかったが、そういうことは中野の領分なので中野にきいてほしいといわれるのがオチなので、これ以上の言及は避けた。その後も中野にまともに質問する機会を失ったのがかえすがえすも残念の一事である。yの留学後、帰国してみると、中野は自己の全集その他の忙事に追われ、高齢化で体調の不調もふかまり、籌子について語るという余裕はなかった。〕〔私への話し手としてはもっぱら原のみが対応し、ご自宅内で私が中野に顔をあわせても、挨拶程度であった。原が手をひろげて、中野にはやるべき最後の仕事がいくつもあるとの、一点ばりで中野をいつも別室に押し込んだのである。〕

y 最後に富本一枝さんのこと、いまも在世中の劇団員、トムさんの生き残りの弟子と自称されている元劇団員、松本克平さんのことを改めておうかがいします。山崎は松本さんにお会いするつもりでいます。

I 富本一枝さんが生きていてくれたら、どんなに、よかったかと思います。籌子は一枝さんにはとくに自分の思いを伝えていたのではありませんか？ 一枝さんは子供も多いので育児や教育に多忙だったはず。籌子さんは自分がよいと思うことは人にもよいとして押しつけるところがあり、そんな一枝さんに迷惑をかけたのではないかと、思います。

松本克平さんはトムさんの劇団員として、籌子さんにつきあったとは思いますが、かの女をどの程度知っていたか、あるいは知っているか、私には分かりません。

y 今日はありがとうございました。

(後半の第5回から第8回分は次号に掲載予定。)